

# 三 八 教

文永六年三月十六日 四八歳

妙法蓮華經。

の融不融の相、二には化導の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相と。  
一に根性の融不融の相とは、籤の一に云はく「列中三意とは、前の両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」と。又云はく「初めの根性の中に二と為す、初めには八教を明かして以て昔を弁じ、次には今経を明かして以て高山を照らす」と。玄の一に云はく「云何が分別せん。日の初めて出でて先づ高山を照らす。此は三蔵の如し。頓教の相と名づけ。乳味を出だす相なり。次に幽谷を照らす。此は浄名の方等の如し。漸教の相と名づけ。酪味の相と名づく。次に平地を照らす。此は上品の如し。猶是漸教なり。熟蘇味の相と名づく。復た義あり、日光普く照らし高下悉く均平なり。土圭をもて影を測るに縮ならず盈ならず。若しは低頭若しは小音若しは散乱若しは微善、皆仏道を成ず。人として独り滅度を得ることあらしめずして皆如来の滅度を以て之を滅度す。具に今経の如し。若し法を縁に被らしむるに約せば漸円教と名づく。若し説の次第に約すれば醍醐味の相なり」と。又云はく「秘密不定は其の義然らず」と。然らず。此乃ち顕露不定なり」と。又云はく「秘密不定は其の義然らず」と。又云はく「復た甚だ多しと雖も、亦漸頓不定秘密を出でず」と。又云はく「今之法華は是顯露にして秘密に非ず、是漸頓にして漸々に非ず。是合にして不合法華に此の経と衆経の相と異なるなり」と。籤の一に云はく「初めに五味、次に不定、三に秘密、即ち八教なり。五味は即ち漸頓なるが故なり。漸の中に四を縁に被らしむるに約して漸円教と名づく」と。籤の一に云はく「若し法をして忘に云ふべし、鹿苑の漸の後に漸を會して円に歸す、故に漸円と云ふ」と。人のを見ずして、便ち法華を漸円と為し、華嚴を頓円と為す、故に漸円と云ふ」と。部の別あるを、乃至般若の中の方便の二教は皆法華の一乗より開出するを知らず。故に「一仏乗に於て帯二帯三を開出す」と、今法華の部は彼の二三なし。故に「二無亦三無し」と云ふ。此見難きに非ず、如何ぞ固く迷へる。又今の文の諸義は凡そ一々の科、皆先づ四教に約して以て麁妙を判ず。則ち前の三を麁となし、後の一を妙と為す。次に五味に約して以て麁妙を判ず。則ち前の四味を麁と為し、醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして、直ちに一語を指して便ち法華は華嚴に劣ると謂へり。幾許ぞ誤るや。幾許ぞ誤るや。又云はく「初ての文は秘密に對せんが為なり。須く○此に準ずるに亦俱頓俱漸不定と云ふべし。文に無きは此亦略せり。既に俱黙俱説互ひに相知らず。又云はく「不定と秘密と俱に互ふ。何ぞ俱頓互ひに相知らざるを妨げん」と。又云はく「漸七に通ず。秘は此の七を出でざるを以ての故なり。故に前の文に、顕露の漸頓及び顕露の不定と云ふ。故に七並びに是顯露の意なり」と。又云はく「文に今法華は是顯露の不定と云ふ。故に七並びに非ざるなり。別して与へて之を言へ於て通じて奪つて之を言へば並びに七に非ざるなり。」

ば但前の六に非ず。何となれば七が中に円教ありと雖も兼帯を以ての故に是  
 の故に同じからず。此は部に約して説くなり。彼の七が中の円と法華の円と  
 其の体別ならず。故に但六を簡ぶなり。此は教に約して説くなり。次に漸  
 頓にして漸々に非ずと云ふは具に前に判ずるが如し。今の法華経は是漸の後  
 の頓なり。謂はく漸を開し頓を顕はす。故に漸頓と云ふ。法華の前の漸の中  
 の漸に非ず。何となれば前には生熟二蘇を判じて同じく名づけて漸と為し、  
 此の二経の中に亦円頓あり。今の法華の円と彼の二経の円頓と殊ならず、但  
 し彼の方等の中に三、般若の中の二に同じからず、此の二と三とを漸の中の  
 漸と名づく。法華は彼に異なるなり、故に非漸々と云ふのみ。人之を見ずし  
 て便ち法華を漸頓と為し華嚴を頓々と為すと謂へり。恐らくは未だ可ならず。  
 是合等とは是開権の円なり、故に是合と云ふ。諸部の中の円に同じからず。  
 故に非不合と云ふ。合とは只是会の別名なり。此則ち已に蔵等の四に約して  
 以て権実を簡ぶに当たれり。故に復是円にして三に非ずと云はず。既に是法  
 華の前の顕露に非ざることを知り已竟れば則ち法華は俱に七教に非ざること  
 を了す、此即ち八教に対して簡ぶなり」と。

別鹿円妙

華嚴の円 — 相待妙 — 鹿妙を判ず

前の三を鹿と為し後の一を妙と為す

方等の円 — 相待妙 — 鹿妙を判ず

前の二を鹿と為し後の一を妙と為す

般若の円 — 相对妙 — 鹿妙を判ず

前四味を鹿と為し醍醐を妙と為す

法華の円の二妙

相待妙 — 鹿妙を判ず

前三を鹿と為し後一を妙と為す

絶待妙 — 鹿を開し妙を顕はす

縦待  
約部

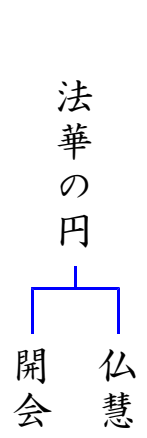
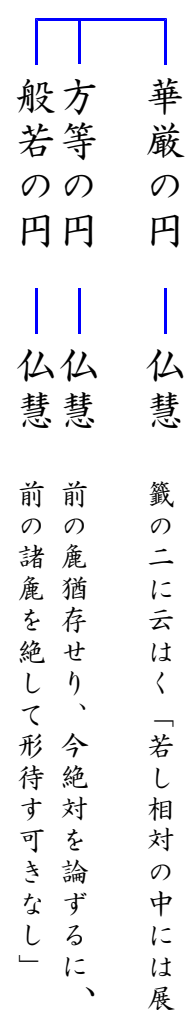
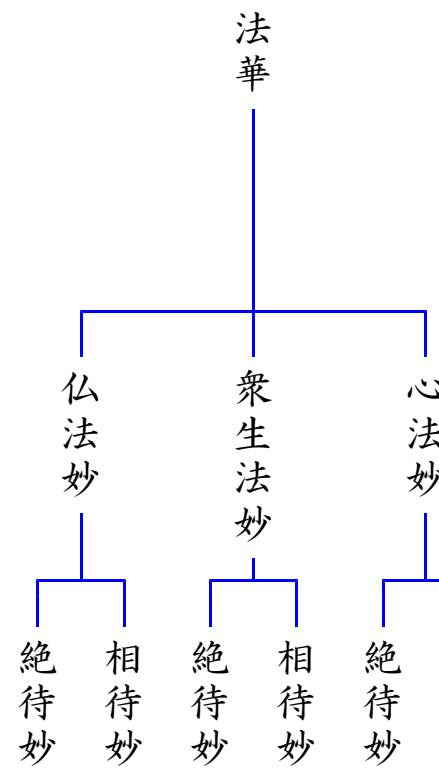
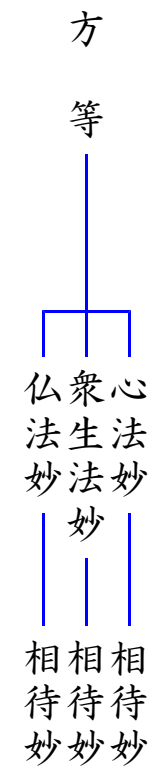
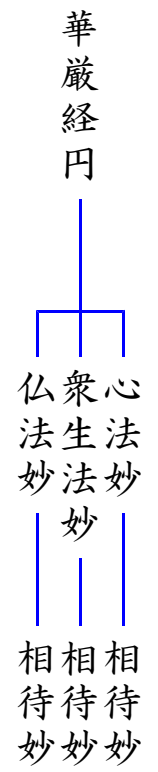
前四味を鹿と為し醍醐を妙と為す

相待妙 — 横待

前の三を鹿と為し後の一を妙と為す

当分 — 相待妙  
跨節 — 絶对妙

籤の二に云はく「当分は一代に通ず、今に於ては便ち相待を成ず。跨節は  
 唯今經に在り、妙意は今に適ひたるに非ざるなり」と。玄の二に云はく「此  
 の經は唯二妙を論じて更に非待非絶の文なし」と。此即ち初門の撰なり。故  
 に二妙を須ひて以て三法を妙ならしむ。諸味の中に於て円融有りと雖も全  
 二妙無し。



玄の二に云はく「此の兩妙を用ひて上の三法を妙ならしむ。衆生の法に亦  
 是の二妙を具足す。之を稱して妙と為す。仏法・心法に亦二妙を具す、之を  
 稱して妙と為す」文。籤の二に云はく「二妙をもて上の三法を妙にすとす、  
 三の妙法華に在りて方に妙と稱することを得ることを明かさんと欲す。故に  
 二妙を須ひて以て三法を妙ならしむ。故に諸味の中に円融ありと雖も全く二  
 妙なきなり」云云。